

「ネバーランド」を読んで

渡辺 楓梨

大人になるのを拒む子どもの国。私はピーターパンのネバーランドをそう認識している。高校二年生になり、進路の話をすることが多くなった。その度に私は憂鬱になる。夢が無い訳ではない。

大人になりたくない訳でもないけれど、今の私にはどうしても「大人」になった自分が想像できなかった。学生を卒業すれば、自然と世間からは大人と分類されるかもしれない。しかし、本当にそれだけなのだろうか。そんな曖昧な存在が大人というのなら、私はまだ子どもでいたい。ネバーランドの住人でいたい。けれど、それは現実から逃げることになってしまう。私はネバーランドから脱出するために、この「ネバーランド」という本を手にとった。

話の舞台は男子校の寮。冬休みを迎えて生徒たちはほとんど帰省していくが、事情を抱えた四人の少年は居残りを決めた。七日間の間に四人は自らが抱える秘密を告白していくという話だった。

誘拐された過去から、自分へ向けられる好意を恐れる美国、両親が離婚調停中で、親権を巡って板ばさみ状態の寛司、デパートの社長の妾の子で、その両親は自殺してしまった光浩、母の自殺

の瞬間を目の前で見てしまった統。この四人の中で私が特に好きなのは寛司だ。その理由は最も共感できるからだと思う。寛司が両親に一人の人間として尊重してほしいと、自分の唯一の居場所である寮の中に入らないでくれと訴えるシーンが、私はこの話の中で最も共感できた。親だって人間だ。よく聞く台詞だが子どもだって人間だ。しかし私達子どもは、親の力がないと生活することが出来ないため、どうしても人間としてではなく子どもとして扱われてしまう。例えば親が一人の人間としてどこか遠い国で暮らしたいと決心したとする。そしたら私達子どもは一人の人間として今居る場所に留まりたくても、結局は親の子どもとして親についていくしかないのだ。そうすることで自分が居た居場所はあっさりと奪われてしまう。それはとても悔しいことだ。このような子どものやるせない気持ちを代弁してくれた寛司に私は胸を強く打たれたのだと思う。

しかし、いつまでも子どもの気持ちではいられないと思ったのが、光浩の告白のシーンだった。四人は秘密を共有するが、その理由の中には「好奇心」もあったのではないかと思う。子どもはうわさ話が好きだ。学校はそのうわさ話が好きな子どもの集まり

だ。

そのため、好奇心に身をまかせ、様々なうわさ話に首をつっこむ。もしかするとその内容が好奇心を超えてしまうほどつらいものかもしれないとは考えてもいないのだ。

光浩は、最初からこの秘密を共有し合うという流れにのり気ではなかった。しかし三人が告白をしてそれぞれが現実と向き合うことを決意した後に光浩はうわさになっている「年配の女性」との話をした。その女性は父親の正妻だった。両親が自殺した後にその女性に引き取られた。しかし光浩はその女性に強姦された。初めての時は十二歳だった。話を聞いた後の二人の沈黙。女性との関係をからかっていた統の止まらない涙。私は彼と一緒に泣いていた。何度も読むのを止めようとしてしまうほどの生々しい描写と、話を遮ろうとする美国に対して光浩が言った「こういう話を聞きたがってたんだろう？」という言葉に深く胸がえぐられた。光浩は決して他人の中に土足で踏み込んできたりしない。彼は四人の中で最も大人だったのだと思う。私は間違っってしまう前に、この本を読めて良かったと思うと同時に、いつまでも子どものままでいられないと強く思った。

光浩の告白の翌日の早朝。寝つけなかった四人が朝日をバックに川べりをランニングするシーン。私はこのシーンがこの本の中で一番好きだ。数時間前まで重く張りつめた空気を作り出していた四人が、他愛もない会話をしながらランニングする。想像するだけで、朝日の眩しさと、現実と向き合い少し大人になった彼らの眩しさが相まって、目を細めてしまいそうになる。しかし、大人になるということは、彼らがネバーランドから出ていくことを決意するということであって、なんとなく寂しい気もする。それでもどこか清々しい。大人になるってきつとこういうことなのだろう。

私はこの本を読んで、ネバーランドから脱出する方法は「許すこと」なのだと思った。四人はそれぞれ現実と向き合い、過去にされた悲しい出来事を許したり、今は無理でもいつか許そうと心に決めていた。他にも、ランニングのシーンの光浩は三人の好奇心を許していたし、他にも揉め事があったが次の日には彼らは笑い合っていた。私も、やるせないことがあっても、それを許す努力をしたい。そうすることで、一つの物事に囚われず、世界を広く見る事が出来ると思う。そしていつか彼らの様にネバーランド

を飛び出したい。